

資料1 「国立公園内草原景観維持モデル事業検討会」委員会議事概要

1. 検討会第1回委員会議事概要

平成12年9月22日(金)

光岡座長(あいさつ)

- ・ 熊本楽座評定会では、平成9年に「阿蘇/千年の草原」ということで1年間キャンペーンを担当した。
- ・ 現在は、草原保全のための新しい社会的な仕組みをつくらなければいけないというところにさしかかっている。

大滝委員(「輪地切り省力化に関する検討グループ」での検討結果の報告)

- ・ 省力化手法はこれまでの様々な検討の成果であり、知恵の結晶として今回の検討グループが生まれてきた。農村の労働力構造は高齢化が進み待つてはいられない。今回の取り組みはタイミングがよく、すぐ普及行政に移行されるべきである。
- ・ 人が入りにくい傾斜地が大きな問題であり、家畜が持っている行動性、採食性を使えないか。「モーモー輪地切り」とか「メーメー輪地切り」といった言葉で、普及の段階に来ている。
- ・ 今回の実証試験ではコストダウン効果をはっきりさせていきたい。また、輪地ができて周辺景観にふさわしくない色彩感がでてくるのも問題であり、そういう面からも検証は必要である。
- ・ 効果測定の一つとして、実証展示の成果が農家の人々にどう受け止められるかは、それにより行政が合意していくという意味で、非常に大事だと思っている。
- ・ 「グリーンベルト」については、これまでの事業の反省を含めて議論したが、防火機能と同時に、起伏を修正したところでは4輪駆動のトラックが入っていく、それによって消火体制が非常に機能化してきたという評価が大きい。
- ・ 将来、牧道等の造成時には、防火帯としての機能を併せ持たせ、少し迂回してでも公共防火帯となるような経路を決めていくべきとの意見があった。
- ・ 防火帯を、数10mから100mくらい幅広く取って恒久的な牧草地にしてしまう、そうすれば火は移っていかない、という発想の転換をすると行政は採択しやすいのではないかと意見もあった。

坂口委員

- ・ 跡ヶ瀬牧野組合は、平成7年から周年放牧に取り組んでいる。30頭から40頭いれば十分赤牛で畜産経営が成り立つので、組合としても増頭に力を入れていきたいと思っている。しかし、跡ヶ瀬集落50戸の中で畜産農家は10戸に減っている。畜産農家が減らないような対策を行政としても進めてもらいたい。
- ・ 維持管理の面では、私たちの組合では、夏場、畑の改良草地と傾斜地に牛を下ろし、その間に草原の放牧地の施肥と掃除刈りをして冬場の餌にする。機械の入るところにはコマツナギはない。草地の管理はうまくいっていると思う。

- ・ グリーンベルトについては、造成後4～5年経った時点で野草化し危険になったので、去年ベルト幅を2m拡げ、機械が行くところは四輪駆動のトラクターで寄せて今まで通り輪地焼きを行い、野焼きをした。
- ・ 昭和20年以降、分収林をたくさん作ったが、森林の基盤整備が必要ではないか。輪地切りが一人で簡単にできるよう、組合や町で話し合い、基盤整備をする必要がある。

山口委員

- ・ 地域の人々が自信を持つこと、全てこれに尽きる。農業を生業としている人たちが健全で、ある一定の暮らしができるという姿がないと、草原は維持できない。だが、それは今の農業情勢や農業政策の面からなかなか難しい。農業希望者が極めて少なくなっている。私が子供の頃は集落全てに牛がいたろうし、お金はなかったかもしれないが、農業を生業としてそこで暮らすという事に対して自信はあったと思う。今、そのような人々はほとんどいなくなり、本当に維持できるのだろうかという思いはある。

村上委員

- ・ 今は山に登る機会が減り、森林は手入れをしなくなったため荒れている。また、牛の頭数も減り、牛による踏圧や足で踏み固めるということがなくなり、山津波など災害が起きる危険性が非常に高くなっている。森林の手入れや赤牛を見直すこと、山に登ることが私達の安全性にもつながる。
- ・ 農産物加工所では、阿蘇の農家で生産する農産品を利用して一次加工や二次加工品の生産を行っており、ホテルや旅館にも使ってもらっている。新しい食材づくりにも力を入れており、最近白玉粉の皮の中にユリネと赤牛のすね肉を入れた「赤牛団子」が好評。また、高菜に次ぐ阿蘇の漬物として芋の茎を利用した「アカド漬け」の生産にも力を入れている。

佐藤委員

- ・ 21世紀は今までより向かい風ではないかという気がしている。熊日の3000万円というお金をはじめ、この2、3年は下流域の人の動きが活発になっている。しかし、農家を支える所まではいっていないのが苦しい所だ。
- ・ この数年は国民的課題として問題提起しなければならないと思い大学に戻り、阿蘇の地域連携を産学官民で本気で取り組む形ができてきている。地域の資源を使って、地域の雇用をどうつくるか、新しい見方でどう活用するかということを、農政局や農業試験場も迎え入れ、組織的な力で考えていこうとしている。

和田委員

- ・ 野焼きや放牧は当然のことと思って育ってきたが、現在の大変な状況がつくづくわかる。温泉地も今一番苦しいというのが現状だが、阿蘇町の観光業者の基本的な考え方は、阿蘇町の地域特性は田園風景と広い草原で、よそと差別化できるのはそれしかない、お客様が一番望んでいるのは阿蘇の草原景観ということだ。
- ・ 残念ながら、赤牛も含めて農産物の流通はそれほどしていないし、我々事業者の流通に乗るものにもなっていないという状況にあるが、何らかの措置をしていただければ変え

られると思う。

- ・ 草原を維持するために誰が負担するのかというのは大事な部分だと考えている。スイスは観光立国であるにもかかわらず、観光業者に対して補助金や助成金は一切無く、観光資源である風景や景観を守るのは農業・畜産業だということで、農業等に関する助成金や補助金が圧倒的に多く、まさに国の力で景観を守っている。
- ・ また、景観を目的に阿蘇に来る方にも負担して頂くべきではないかということを経験している。阿蘇町では観光関係で自主的に徴収できる入湯税があるが、こういう状況のなかで、来たお客様一人一人が負担するというのであれば、入湯税を発展的に解消して環境税とすることにより、観光資源である景観保全などに使っても良いのではないかと。システムを少し変えることにより、広く浅く負担してもらうなど、できることがあるのではないかと。もちろん我々も何らかの形で負担するし、理解を深める事も大切だと思う。

野口委員

- ・ 畜産業の状況は牛の頭数も減り、畜産の戸数も減っているという状況に加え、赤毛牛は黒毛牛に比べて安くなっている。農家では、高く売れば儲かったと思いがちだが、コスト意識をもう少し持ち、記帳することなどにより経営感覚を身につける必要があるのではないかと気がしている。
- ・ また、放牧適性はどちらかというと赤牛があり、最近の消費者ニーズをみても、健康志向から脂肪が少ない赤毛がいいという人は多く、そのような宣伝も必要だと思う。
- ・ 畜産振興、農業振興に関して、基盤整備についてはありとあらゆる補助金がそろっているとんでも過言ではない。そのような補助金をよく周知してうまく利用して頂ければと思う。また、熊本県の草地研究所では周年放牧によるコストダウンの試験研究をしているので、その結果を活用されてはどうか。
- ・ 輪地切りに関する補助については、平成8年に私が担当で、モデル的にラジコン草刈り機の助成やグリーンベルト造成のための補助を実施した。
- ・ グリーンベルトについて、帯状に幅を広げるというのは非常に良い考え方だと思う。草地の生産力もあがるし輪地切りの省力化になり、こういう方向ではないかという気がしている。

永田委員

- ・ 行政として、草原をどう維持していくかは、最終的には畜産業の振興を図ることである。どうしたら収入を確保し増やすことができるかは難しいが、県でも今後検討していくべき課題だと思っている。
- ・ 草原の広がりには牛が足りない状況のなかで、牛を飼いたい、草原を利用したいという人はかなりいるらしいが、入会権の調整が難しいということを知っている。畜産振興が深まれば、ある程度そのような制限の中で変わってくると思う。
- ・ 合意形成については、阿蘇に住んでいて、阿蘇の草原景観をどのように思っているか、地域の人を聞いてみたい。そして、牧野組合や地域の住民が何をしたいか要望を聞

き、また我々が何かをする時には牧野組合の受け入れが必要であるため、牧野組合を中心とした地域の方々と議論をしていく必要がある。

河崎委員

- ・ 私も阿蘇に生まれて、幼いときに祖母が阿蘇山のことをオングキ山と呼んでいた。四季折々の阿蘇の風景を見て、畏敬の念と怒りの念の両方を持って阿蘇の農家住民は数百年数千年を過ごしてきたものだと思う。
- ・ 草原が危ないということについては、平成7年には表土が流れて災害が起こっており、草地も牛馬で踏み固めることにより土砂流出を防ぐ必要がある。また、阿蘇郡全体から九州各地に水が流れているということで、水源税などが可能かどうか、考える必要がある。とにかく地方自治体また農業団体、農家の方々の努力だけでは何ともしようがない面もあるが、行政としても何とかしなければならないことであり、そのためには畜産でペイするか森林木材でペイするか、そこを重要視しなければならないと思っている。
- ・ 行政も含めて国民全体の理解を受けて、すばらしい阿蘇の千年の草原が維持管理されていくように、神に祈りたい気持ちだ。

大滝委員

- ・ 草原の維持管理に関する人間の知恵が生まれてきたと思っている。情報も整備されてきた。数年前までは非常に初歩的な話題で、今日のような密度のある論議はなかった。そういうことは草原利用の歴史の中で画期的なことだ。今までは危機感だけが先立ち、そういう過程の中で草原が荒廃し、灌木林になっても自然の成り行きであるという論議が堂々と通り、どう捉えていいのか分からない時代があった。今は、正々堂々と国民の環境資源として草原が必要であるとか、草原景観、観光行政として、また水源地域、国土保全地域として草原は大切であるとか、農業や地域振興も合わせて議論できるようになった。こういう過程の中で草原の歴史が変わっていく、啓発されていくということ、私たちが実感し、体験として理解できることが一番良いことであると思っている。
- ・ 実証試験は、極めて実践的なものであり、評価をきちんとして何とか普及行政に結びつけていただきたい。

今江委員

- ・ 阿蘇の草原は自然の状態であるのではなく、野焼き、採草をするから維持されている。少しずつ理解が進んできたが、分かっていない人もいるという状況である。
- ・ 阿蘇の景観を、阿蘇の人は当たり前だと思っている。先祖代々やってきたことをみんなですており、だからお金を出せとも応援してくれとも言わなかった。農家の人たちの手間を考えず、その結果のみ景色がいいと受け取っている人が多い。阿蘇の人々にとっては生活の場であり「楽しみの場、いやしの場」といった薄っぺらなことを考えているわけではない。事務局は反省しながら書いてほしい。
- ・ チカラシバは外来種、というのは間違いである。田圃や畑の周辺にある草で、阿蘇にも沢山あった。ただ、原野にはなかった。牧野改良で野草を全部取り払って牧草を植えたから畑と同じになって、畑の雑草が生えたということである。

- ・ 草原という言葉と同じように使っているが、阿蘇で一番大切なのは、長い草の生えた草原であり、ここにハナシノブもあればヒゴダイもある。阿蘇の自然の大切さとなると、草刈りである。牛は草の上を全部食べるため、阿蘇全部に放牧したら、長草型の草原はなくなる。人間は土地の使い分けをしてきた。斜面の草を使い有機肥料にというサイクルで田圃を作っていくなど、原点は土地と草の使い方の基本を考えること。阿蘇では、自然とうまく関わってきた知恵がある。
- ・ それから、野焼きだけしていたら、今のいい草原は無くなり、茅場になる。秋の草刈り、1年間の休み、翌々年の野焼き、草刈りというサイクルで草原が維持される。そのバランスを取らないことには草原の維持にはならない。少なくとも長草型で今年刈ってもいいところ、今年休んでいるところを区別することが必要である。それから、放牧により刈り込んで短いところ、ススキだけが大きくなって他の草は入っていないところ(茅場)、これらも草原であり、全部性質が違う。草原という言葉と同じように使わずに書くようにして頂きたい。

山口委員

- ・ 農政の方から20年来ずっと指摘されてきた農家のコスト管理、経営努力、今の時代にあうような農家の意識、といった問題については、ある部分はあっているにせよ、現場では、瀬戸際の中で頑張っているわけで、みんな極めて当たり前のこととして努力している。それでも、その努力を越えるような政策やいろいろな問題が出てきてそれとどう戦うかということで、せめぎ合い、しのぎ合いがされているという現状を見て欲しい。
- ・ 草原の種類がたくさんあるとしても、その草原を維持できるかどうかというぎりぎりのところで動いている我々には、草原という表現をしなければますます混乱してしまうだろう。今一番欲しいのは農業政策の成果。こうやったら成功するだろうという事例が欲しい。もう理屈はいいから手がかりが欲しい。

坂口委員

- ・ 常日頃、後継者が出てくるような牧野の管理、経営をやっていこうと自分の畜産を考えている。今は赤牛で計算が成り立つ。そのような牧畜をやれば草原は維持できる。ただしすべての牧野組合に牛がいるようにしないと維持管理は難しい。そのために町や県が手を加えていくことが、大切なことだと思う。

- 以上 -

2. 検討会第2回委員会議事概要

平成13年3月23日(金)

大滝委員(輪地切りの効果について)

- ・ 野焼きでは、モーモール輪地の試験地でよいデータがとれ、効果が示せた。
- ・ 13年度は3kmの長さで実用段階に入った試験を行うが、普及行政に携わる多くの人や地域の人々に試験や来年3月の野焼きの状況を見てもらうこと、ビデオやテキストブックを作ることなど、普及にどう結びつけるかという視点で考えていく必要がある。

永田委員:

- ・ 振興局としては、行政の立場でどのように畜産振興を図っていくかという点を進めたい。175牧野組合が畜産振興に取り組める体制づくりをやらなければならない。
- ・ 現在、畜産振興に関する基本計画を策定中。今後の推進方策としては、多くの牧野の方々の意見を聞きながら進めることを前提に、牧野組合の連絡会議、牧野活用促進プロジェクトの推進、また、牧野活性化センターの設置などを考えている。
- ・ 牧野と森林区域の利用調整について、輪地切りの部分を林道、管理道として活用することも含め、いろいろな形で草原を利用していきたい。
- ・ 戦略としては技術的、経営的、構造的視点などから畜産振興を図り、その結果、草原の維持につながっていくということで、それをバックアップしていくために、いろいろな観点から検討してまとめていただければ牧野活性化のために役立つと思う。

今江委員:

- ・ 「道を作る」というアイデア、道具という形で防火帯ができる場所は、恒久的な防火帯にしていくということ、大々的に謳い上げて良いのではないか。
- ・ 一番の問題は草の利用価値がなくなったこと。「草の利用促進」を項目に上げて、どこで草が使えるかを考えることが草原維持に一番大事である。放牧を増やしても採草場がないと本当の畜産はできない。野焼きだけしている状態では茅場になる。

坂口委員:

- ・ 低コスト畜産を進めていくには、いかに野草地を利用するかが重要で、改良草地は草を切って冬場の餌や販売用にすれば低コストにつながる。
- ・ 昔は農村救済事業で草を切れるところを全部山にしていたが、これからは春は新芽が美しい落葉樹などを植え、ある程度、基盤整備をして輪地切りが必要ないようにしていくと草原を維持していくためにいいと思う。
- ・ 私達には分らないが、よその人からは阿蘇の草原は大した財産と見られている。

佐藤委員:

- ・ 昨年、「地域連携フォーラム」を法・文学部の戦略として立ち上げ、観光やツーリズム、ベースとなる畜産や農業などを中心に、生業作りや雇用の振興をいかに地域の資源を活用して成り立たせるかということで、行政や地元の産業とリンクする形で取り組んでいる。

- ・ 行政との人事交流を進めるため、農政局や九州農試、県からも参加いただいております。地元の村上さんや坂口さんなど生業の方たちにも研究協力者としてご参加いただきたい。
- ・ 農政関係の研究会では、アグリフォレスト（混牧林）が研究されており、それを阿蘇で取り入れ、林政と農政、観光行政の共生ゾーンのような草地と林地をつくり、観光や新しいツーリズムの振興を図り、そのお金が地元の農家に落ちるしくみを作ることが大事。

村上委員：

- ・ 高齢化が進むなかで、若い人は生計を立てるため、牛を処分して別な生き方を考えている状況である。農家では山の草が肥やしとして一番良いということを知っており、味を統一し、製品の質を高めるために、振興局で野草を使うことの指導を農家にいただきたい。

和田委員：

- ・ 農水省の農村景観百選に、阿蘇町の小野田が草原＋村落の景観で選出されている。
- ・ 修学旅行では、阿蘇地区のテーマは自然環境体験で、農家民泊＋ホテル宿泊で農業体験をするため、5月中に千数百人が阿蘇周辺に泊まる。全国的には進んでいる感じがするが、名前が先で全体のスキームは出来ていないのではないかという疑問がある。
- ・ 阿蘇の自然環境＝「千年の草原」であり、草原を守る牛を千年の草原ビーフとか草原ビーフと認識させていきたい。観光業者は食べ物に関連して地元貢献する以外にないので、お客さんに食べてもらうための工夫をしっかりとやっていきたい。阿蘇を対外的に環境学習、自然環境で見るときは「千年の草原」を枕詞に使っていきたい。

坂口委員：

- ・ 和牛はサシがあまり入らず、味があってヘルシーな肉が良く、粗飼料をたくさん食べた牛は乳がんを抑制する成分があるという。地元で赤牛肉が食べられる店は少ないが、近くのホテルなどで食べられるようにして、地元から発信して、阿蘇で昔から続く赤牛生産が続けられるようにしたい。これが「千年の草原」が続いていくもとであると思う。

村上委員：

- ・ 油がないのはスネ肉あたりで、すね肉スープを作り、喜ばれたことがある。

光岡座長：

- ・ 「草原牛」という名前について、食肉組合では「肥後ビーフ」と言っているため公的には使えないが、この検討会の中ではぜひ「草原牛」という言葉を使って欲しい。

河崎委員：

- ・ 入会権の改善は放牧農家の合併統合を含めた形で行政指導していくべきではないか。
- ・ 草の利用は阿蘇の赤牛に、阿蘇の赤牛が東京関西で神戸牛に化けているという話がある。
- ・ 林業と畜産がペイすれば、草原の問題は解決すると思いますが、それがなかなかうまくいかないため、千年の草原をどう維持していくかを考えていきたい。
- ・ 来年3月に全国草原サミットでは、畜産というのがテーマになるのでしょうか。

大滝委員：

- ・ 阿蘇は草原面積 23000ha で規模的に横綱級であり、それにふさわしい内容にしたい。学

術的なものに加え普及的、イベント的、体験的な内容を入れていこうとしている。体験は感動につながり持続性のあるものであり、「阿蘇大好き人間」が増えることが草原の活性化につながるということから、野焼きの応援部隊なども盛り込もうと思っている。しかし、ボランティアの次にはモーモータンなどが出てこない、いつまでもボランティアでは耐えきれない。第5回では感動と行動を核にしていきたいと思っている。

環境省（国安）：

- ・ 阿蘇の独自性を出そうということで阿蘇デザインセンターや町村会事務局で調整中。阿蘇は生産地であるということ強く打ち出すこと、また、多くの地元の人に参加できる形にするということを事務局サイドでは検討している。

光岡座長：

- ・ 全国に発信するまたとない機会なので、ぜひ大規模なものをやっていただくことを期待している。

大滝委員：

- ・ 採草地に採草利用の圧をかけることにより草原の貴重な野の花の生育環境ができたという歴史的なことを考えると、今後どう利用圧をかけるかということが重要である。
- ・ 現在有機農業は追い風であり、ススキの堆肥の広域的流通に向けて刈り取り・運搬手段などの勉強を検討会で行い、基本的なことが述べられないと本質がつかないのではないか。

- 以上 -

3. 検討会第3回委員会議事概要

平成13年12月18日（火）

【ワーキングA】

今江委員

- ・ 景観調査は、あたりまえの事を言っているだけのようだが、データとして確認したことに意味がある。調査の中で、数は少ないが地元の人がいいと思う所が上がっており、資源の掘り起こしにもなっている。また、アンケートの回収率が良かったことは、草原に関する意識が高まっていることにもつながる。
- ・ 調査データは阿蘇の草原が持つプライベートの様なもので、公開できない部分もある。
- ・ 盆花を採る草原について、草原は採草か放牧、すなわち人間が草を取るから、多様な草花がある。野焼きだけを続けるとススキだけの茅場になる。

光岡座長

- ・ 景観を捉えるとき、草千里や米塚などはわかりやすいが、大観峰から見た草原といった時はどこをさすのかわからない。地元で、国も県も参加して名前をつけたらわかりやすいのではないかと、そういう運動をして頂きたい。

佐藤(誠)委員

- ・ 南郷谷の評価が低いと、特有の草原景観があるのもっと評価が高くて良いのではないかと。戦略的に考えると、2つの広域農道ができて、農的インフラが今後どうするかたちで農業や観光に結びつくかということを見越して先見性を見ても必要である。

坂本委員

- ・ 保全すべき草原の評価について、重点的に考えていくのは非常に大事だが、ここだけという報告書であってはならないと思う。

山口委員

- ・ 重要地域の報告について、同じ草原で一括りにしているが、実際は改良草地、野草地、放牧地ではかなり違いがある。チカラシバの問題を含め農家は自然条件と常に格闘している。観光道路からの眺めで論ずるだけでなく、畜産振興にもつながる取り組みがほしい。農家としては、見る側と行う側では大きな違いがあると感じた。

【ワーキングB】

大滝委員

- ・ モーモー輪地切り実証試験は、官民一体となったパートナーシップによる事業を行うことができ、学会に発表できるくらいの内容の調査ができた。これまで解らなかったことを農家側にはっきり伝えることができるようになったことは最大の成果だと思う。
- ・ 社会的気運が熟しており、加えて実践した組合長から「いける」という言葉が出たのでこの技術は一気に普及すると思う。
- ・ この技術は自己資本である自分の牛を使ったことに意味があり、また、土壌流亡もなく自然に優しい技術であり、楽しい技術である。

村上委員

- ・ 輪地切りは傾斜が厳しいところが多いが、妊娠牛を入れた方がいいという話を聞き、そんな安全なところでモーモー輪地切りはやっているのかなと思った。

大滝委員

- ・ モーモー輪地切りだけでなく、ヤギや道産子などによる省力化も検討している。今回の試験でも牛は35度の傾斜まで登っており、ヤギの場合は60度位の傾斜でも可能である。
- ・ 輪地切りを行う人の平均年齢が10年後には66才になることを考えると、牛ですべてカバーできるわけではないが当面一番いい技術だろうと思っている。第1目標としては、人手で行う輪地切り延長を現在の640kmから300km位に短縮することである。

山口委員

- ・ 多角化して専業農家を続ける農家は、牧野に毎日通えないため広い所に放牧するのが現実。限られた面積に牛を囲い込むと、始終牛を見にいかなければならず、実際できるかどうかということが本音としてはあると思う。
- ・ アンケートで一番気になるのが、モーモー輪地切りは今後「補助があるならする」という意見だ。補助金に依存する体質が問題だし、極論をいえば何に使うかわからず、額面通り大半が導入したいと思っているかどうか問題がある。

山内委員

- ・ 牛が行かないような35度以上の輪地は640kmのうち10%位ある。道産子による輪地切りでは、電柵を破ることがあり管理面で問題があるが、灌木類も除去できるという利点がある。

坂本委員

- ・ モーモー輪地切りは、機械とは違う可能性があると思うので研究が望まれる。
- ・ 補助事業に頼ることなくということもあるが、農政局でも農業・畜産振興という観点から色々な手段を持っており使えるところは使って頂きたい、相談にも応じていきたい。

【ワーキングC】

佐藤(雅)委員

- ・ 草原問題の理解者が増えれば合意形成が進んでいくと思うが、行政間でも合意形成は必ずしもうまくいっておらず、ワーキングCが一番難しい部会ではないかと感じている。
- ・ 都市住民との連携について、例えば、阿蘇の草原は人為的な行為による草原であるということがかなり浸透してきたと思う。
- ・ 畜産振興が王道であるが、草原は国土保全や水源涵養など多面的な機能を持つ。また、林地の増加で輪地切り面積も増えているため、土地利用なども考えていく必要がある。
- ・ これまで異分野で集まることはほとんどなかったが、「草原が持つ様々な価値の活かし方を考える会」では、草原保全に向け行動に移す、歴史的な一歩を踏み出したといえる。草原への立ち入りには、ルールづくりが必要であるということで、お互い同じテーブルにつき、具体的に考えていくスタートラインに立った状況だと思う。

坂口委員：

- ・ 草原内での活動について、一番いい時期である9月から10月の阿蘇の放牧地は、チカラシバが一面に生え、都会の人が入ったら二度と入りたくないと思うのが現状。各牧野組合ではチカラシバの問題で、草原の景観などとても考えられない状況である。
- ・ 放牧地と採草地の交換ということ、牧野組合に浸透させていく必要がある。放牧地、採草地を守るためには、2番草は夏の間1回掃除刈りをするのが大事である。

和田委員：

- ・ 観光客アンケートを実施した8月は夏休みという特殊な期間であり、年間の動向とは違う。草原維持管理について知っている人が3割とあるが、年間観光客を対象にするともっと低いと思う。草原への立ち入りについても、組合と観光客の温度差はこれ以上あると見る方がいいと思う。
- ・ アンケートで、観光客のニーズが阿蘇山だけでなく草原景観が大きいことがわかり、今後草原景観とどう関わっていくかを考えなければならない時期にきていると思う。

山口委員：

- ・ この10年位、草原を眺めるだけでなく身近なものと感じてもらうために、空間を限定して草原に触れるところ“人間を放牧する所”として開放している。
- ・ 今、草原を利用するというと真っ先に来るのは商業資本であり、ルールも決めずにいると草原が草原でなくなるのではないかと。お互いが本音で議論しながら調整し、ルールを決めていく必要がある。

山内委員：

- ・ アンケート調査結果について、これまで漠然と思っていたことが数字的にはっきりしたという意味で、今後草原問題を考えていく上で非常に良いと思う。

富田委員：

- ・ 振興調整室は、農政、林務、観光のとりまとめであるが、行政の中の合意形成が難しいと感じている。
- ・ 阿蘇への観光客は県の観光客の3分の1を占めており、熊本県にとっての阿蘇の草原の重要性をもう少し認識してもらう必要がある。
- ・ 一番難しいのは合意形成の進め方であるが、牧野組合の方々の意識も変わってきており、畜産振興と観光をドッキングさせて、阿蘇の草原を保全できればと思う。

佐藤(誠)委員：

- ・ スギ、ヒノキと草原の境の部分に、アグロフォレストリーというか、牛馬を間に入れることによる新しい土地利用の模索について、また、農林地の確保と保全、若しくは多目的利用への都市のトラスト的な展開について、報告書に加えていただきたい。

今江委員：

- ・ アンケート結果で、「放っておけば草原でなくなる」という認識が一般の人々にここまで定着したのはすごいことだ。これはシンポジウムなどの盛り上がりのなかで進んできており、誤解もあるが理解も進んでいる。

【その他】

山口委員：

- ・ 草原問題で必ず出てくるのが牛であるが、狂牛病の問題を抜きにしたら牛の将来はない。今回の議論の中で一言も出てこないが、難しいことは避けて通るという議論では本質に迫ることはできないと思う。

光岡座長：

- ・ 狂牛病の問題については、報告書でも何らかの形で触れるべきである。

坂本委員

- ・ BSEについては、消費者の方ともお話し、解決のために頑張っているところであり、生産者の方々の不安を1日も早く解消できるよう取り組んでいる。信頼していただきたい。

佐藤(誠)委員：

- ・ 狂牛病の問題については、草地畜産・草地酪農は阿蘇の本命として、新しい生産のあり方を打って出る、チャンスと捉えられないか。

光岡座長：

- ・ 草原景観維持モデル事業といっても農・畜産業、林業、環境、観光など色々なことが絡んでおり、これらの合意形成、総合的施策をどうやって出すかは非常に困難なことかも知れない。特に、見る側、使う側のギャップは大きい。第4回委員会までに、皆さんも考えてきていただきたい。

- 以上 -

4. 検討会第4回委員会議事概要

平成14年3月28日(木)

<各ワーキンググループ検討結果の報告・コメント>

瀬井委員/ワーキングA座長代理

- ・ 草原は年々確実に減少しており、そのペースは凄まじい。昨年、一の宮町と波野村の草原を調査したが、波野村の草原は植林や放棄により10年間で1/3が失われている。このまま推移すれば20年後には波野村の草原はなくなるということがいえ、まさに危機的な状況である。
- ・ 波野村の草原はほとんど個人所有であるが、一の宮町はほとんど牧野組合所有であり植林などには組合の意思決定が必要なため、草原消滅のスピードは波野村ほど早くないが、一旦決まれば組合所有の草原全域が植林或いは放棄されるため、影響は大きい。
- ・ 草原の問題をいろいろ検討しているが、森林整備公団の事業で大規模な植林が行われるなど、国では以前のままの政策で予算が出ており、草原を増やすための行政施策は何もないため、減り続けるのは当然だと思う。
- ・ 草原の質が変わってきており、10年前と違うことは、草原の中に道がない、草原の中を歩けない、草原に花がない、ということ。以前は地図上に道があれば目的地にたどり着けたが、人の利用がなくなり、舗装されていても藪性の植物に覆われて車でさえ通れない道がかなりある。また、放棄された場所は藪になり野イバラなどトゲのある植物が沢山あり全く歩けない状況である。
- ・ 野焼きばかりしている場所は草原の質が変わってきており、動植物にも影響を与えている。藪では草原植物はダメになり、野焼きだけではススキだけが繁茂してその他の植物はダメになる。箱石峠では野焼きだけになったため、コジュリンの生息環境がかなり悪化しており、オオルリシジミの生息地でも同じような状況である。
- ・ 阿蘇には多様な草原があり、そこで動植物が生きてきた、ということが一番認識しなくてはならないことである。多様な動植物が生息・生育していくためには、いろいろなタイプの草原を保全していくことが重要である。

山本委員/ワーキングB座長代理

- ・ 輪地切り省力化技術に関しては、事務局からの資料のとおりだが、少し広い視点からコメントしておきたい。
- ・ 草原を維持するための火入れがきちんとできるようにするために、1つは、輪地をできるだけ短くすることが第一で、例えば、森林との境界線を短くする、森林を草地に戻すなど、また、道路を輪地の部分に作るなど、恒久的な輪地もここに含めていいと思う。
- ・ 2つめは、ボランティアで足りない労力を補うシステムを考えることも必要である。
- ・ 3つめは、輪地切り作業の省力化で、機械、グリーンベルト、家畜などの省力化手法に加え、次のステップアップとして、火入れが放棄された草原をもとに戻すということも考えるべきだと思う。

- ・ 火入れがされないところの植生変化の調査では、1年放棄するだけで1.5～2倍に近い植物の量がたまり、火入れをすること自体が非常に危険な状態になり、結局はそれ以降火入れが行われなくなることがよくあると思う。何年も放棄された所を火入れができるようにするために、牛を入れることを考えたらどうかと思う。
- ・ 8年位放置された草原に牛を入れたところ、草の量は1年目で半減、2年目で1/3位に減り火入れができる状態になってきており、火入れによりもとのような草原に意外と早く復帰させることができるのではないかと思う。

佐藤委員 / ワーキングC 座長

- ・ 第5回全国草原シンポジウム・サミットin阿蘇では、都市からの参加も多数あり、草原問題に関する関心と熱意の高まりを感じた。スタッフも行政、NGO、NPOなど様々で、合意形成についての一歩が行われたと思う。
- ・ 草原が守られてきたのは入会権と広域農業開発事業のためで、これがなかったら恐らく草原はなくなっていたと思う。再生に向かって、これからがスタートというラインにたったところであり、頑張っていく必要がある。
- ・ 牧野組合との意見交換会では、協力して草原を守っていこうという話があり、隔世の感があるという思いであった。草原の利活用について意見交換を行ったが、取り組みを進めていくためには、地元の人々でルールを作っていく必要があると思う。
- ・ 気圧が低いので、マラソン大会や高原型のスポーツなどに草原を活用していけるのではないか。また、JR、JTBで、草原を活用してバスツアーを出す予定もある。
- ・ アンケート結果では、8割が草原を目的に来訪しているとあるが、あと2割の魅力も大事であり、全体的な阿蘇の観光ということを考えていく必要があると考えている。
- ・ いろいろな分野で取り組みをしていく必要があり、土地利用計画をたてていく必要もある。スギなど木ばかり植えずぎてもいけないのではないかと思うので、その辺、科学的にも学術的にも確立していったいただきたい。
- ・ 資料の最後に「推進機関を作っていく」とあるが、事務局の問題などがあると思う。今後の合意形成について、どのように推進体制をとっていくかということを議論していただき、いい知恵を貸していただきたい。

< 議 論 >

和田委員：

- ・ 今後の観光の方向性について、阿蘇が勝負できる最も強いものは自然そのもので、アンケートでも、草原景観は雄大であるというところに行き着いていおり、目指すべき方向はそういうところではないと思う。
- ・ 草原を見るものだけからは是非利用させて欲しい。観光業者も草原景観があって当然なものという発想から、お互い利用したり利用されたりという時代が身近に来ていると思う。
- ・ 今年、ある航空会社が50万部もパンフレットを作り、北海道、沖縄、阿蘇を売ってくれる。その中でトレッキングコースを組み入れる話も出ており、アンケートにある要望か

ら何か一つでも頭出しができればと思う。

山口委員：

- ・ 阿蘇で暮らし、農業をやっている当事者の立場から、1年あまり草原について多くの方が時間やエネルギーをつかって議論をしていただいたことは有難いと思う。
- ・ 草原保全全体に係る提言で、「広大な阿蘇の草原を地元の牧野組合や農業・畜産関係者だけで維持・管理することはむずかしい状況となっており…」というくだりは非常に残念だが、納得せざるを得ない状況がある。本当は、農業者に元気をだしてもらうため、少し手助けしないと無理かな、という書き方までいきたかった。
- ・ 基本的には、農業が元気をだすことが草原維持に大きく寄与する。今後は、農業・畜産業をどうするかということとセットでこの問題が進んでいくといいと思う。
- ・ BSEの影響が今年の夏か秋まで続くと、畜産業は壊滅的な打撃にならないかと心配しているときに、切り口は何であろうと阿蘇のことを論じられることは励みになる。農業を生業とする人たちが、こういう動きや意見を励みにしながら、新しい意識で阿蘇の農業・畜産業に何かを見つけていけるといいと思うし、自分でも努力したい。

村上委員：

- ・ 先日、大観峰で吹き溜まりのゴミの山を見て、これが一番大事なこともかもしれないと思った。そういうところに放牧している牛は食べたくないと思われるかもしれないし、地元としては、周辺をきちんとしていくことについて話合わねばならないと思う。
- ・ 牛肉の消費については、農協からの割り当てがあり、農家は助け合いで頑張っている。牛肉を買いたいという気持ちに駆り立てていくには、どうしたらいいかという辺りも考えていただけないかと思う。

山内委員：

- ・ 阿蘇の草原保全全体にかかる提言の2番目で、農業・畜産業の振興が書かれているが、具体的に取り組むべき事業のイメージにその辺がないことが気になる。

坂本委員：

- ・ 「BSE問題が深刻化…」という表現は、さらに進行しているような誤解を生むので修正していただきたい。少なくとも昨年秋以降は新しく異常プリオンを餌として使う可能性はなくなったので、新しい発生はなく終息に向かう。
- ・ 草原をもっと利用していくことについて、農林水産省では農業・畜産業の振興という観点からの仕掛けは沢山あるので、是非使っていただくなり相談していただきたい。

富田委員：

- ・ 資料3の6河川の源流域で「250～300万人の受益者」とあるが、熊本市、福岡、大分などどの程度を足したらこの位になるのか。
- ・ 資料2の「広葉樹への転換」について、広葉樹であれば輪地切りをしなくても良いのか、クヌギなどは燃えないという話を聞いているが、単純に広葉樹ということでもいいのか。
- ・ 資料1の図で、管理状況と景観の評価を重ねると見にくいので、管理状況の4と5と、代表的な景観のランク1だけを抽出した地図が欲しい。

佐藤（誠）委員：

- ・ 草原保全推進機関の設置について、住民や行政や地域の受け皿、大学も含めた実践的な中間組織のようなもの、長期的に見据えて地域の生業に結び付けて草原を守っていく組織を、具体的に書き込んでいただけないか。草原シンポジウムと田園シンポジウムによる盛り上がりを受け、この春から具体的に動くような形で考えたらどうか。
- ・ 組織には愛称が必要で、公募も考えられるが、例えば阿蘇グリーンバンド、草原バンドのように連携組織のようなものを謳うなど、保全よりも攻撃的なネーミングが必要。
- ・ 農家に対する救済資金も火急に必要で、草原トラストで億単位の金でもつくれる状況にあると思う。草原のみでなく生業とか人に光をあてることが必要で、今後は環境省、農水省、国土交通省、文部科学省の4省連携で、地域を巻き込み、具体的に草原トラスト、あか牛トラストなど、一歩進めていくことをお願いしたい。

事務局（鹿野）：

- ・ 草原保全推進協議会のイメージは、いろいろなことを進めるセクターが、それぞれ何を考え何をやろうとしているのかということの一つの土俵の上に持ち寄ることから始め、そのなかで、似たことがあったときに各省連携事業などに結びついていくのかと思う。まずは、連携できるものを模索する、調整できるものは調整していくということから始まっていくのかと考えており、むしろ最初は「連絡協議会」かと思う。

佐藤（雅）委員：

- ・ まさに近々の課題で、何らかの形でここで出て行くべきである。省庁が連携する事業にならなくても、地元がそうした動きをつくりだしていく、その中に多様な人が入り込んでいくということで、年次ごとに目標を定めてやらないとまた同じ話になる。活用のための拠点や草原の駅のような話がでていますが、地元ももっと勉強しなければならない。
- ・ 推進協議会とは別に個別の会が必要だと思う。その中から派生していくものをつくっていかねばならない、例えば、ガイドや活動リーダーについて、生業とまではいなくても小遣い銭でもとれるような取り組みや人づくりもしていく必要がある。

光岡座長：

- ・ 一つのテーブルの上に乗って動き出すかということに今来ているのではないか。

坂本委員：

- ・ 今日、非常に網羅的、かつある面では具体的なとりまとめができており、今後その進め方について、農林水産省の立場では、農業・畜産の振興という面ではいろいろな手段を持っており、新たな事業を作らなくてもお手伝いできることがあると思う。
- ・ 具体的な話が出たので、アイデアを絵まで描いて、そこに補助事業など使えるものを使えばいい。それがどうかという仕分けは県と内部での連携で進めていくということで、できることは沢山あると思うので、地元からの盛り上がりを期待する。

光岡座長：

- ・ 推進協議会について、農水省、国土交通省、民間などがどういう形で入れる、ということフローチャートなどでまとめるとわかりやすい。現在あるものだけでも、その他の

考えられる事業などを入れると納得しやすい。それが、例えば、阿蘇地域振興局が窓口で事業を把握しているということになると一般の人もわかりやすいと思う。

事務局（鹿野）：

- ・ 例えば、草地内の管理用の道路は環境省の公共事業の対象外だが、公園のレクリエーション利用のためにつくる場合は対象となるなど、どういう観点でどの役所が関わるかはできるが、それぞれの行政が従来持っている事業で関係を整理するのはなかなか難しい。ここでのイメージは色々な要望や動きなどに合せて、こんな形で各省庁の事業が乗せられる、ということを考える場になればと考えている。

佐藤（誠）委員：

- ・ 今何とかできるかもしれないという機運が高まっている。小さくてもいいから具体的な事業をやろうという形を委員会の名においてぜひ提案したいと思う。

山口委員：

- ・ 議論の内容が私の日常感覚と遊離しているように思える。例えば行政が何かやるときに、農業者が農業をやり続けていく意欲をどうすればもう一度取り戻せるかが一番の問題であるにもかかわらず、それを長い間事業で誘導したから失敗した。農業を生業とする人々がどうすればここに住み続けられるか、ということを考えない限り我々の意識とは距離がある。この類の集まりは、一番肝心の当事者と意識がズレてなかなか実効性のあるものになってこなかったのではないか。
- ・ ここでの協議や意見が、町の声や暮らしのなかで随所にでてくるようになったり、目的意識を共有しながら、結果として成果があがるという形になっていくとよいと思う。

光岡座長：

- ・ もう少し協議会に具体性を持たせないと結論で突き放されてしまう感じがする。具体的に1、2項目、何というセクションをつくれますなど、もう一步考えていただけないか。

山内委員：

- ・ 行政の場合、今までの縦割りの仕組みがあり設置自体も難しいし、論議も間にあわない。むしろ、本当に必要性のある地元の生産者なども含めて民間が主体になって阿蘇の草原保全を考える機関を設置し、その中で論議して、事業を進めていく上で環境省や農水省、県などが何ができるかというのが良いのではないか。

光岡座長：

- ・ 民間を主体にした協議会、それに各省庁が参加する、ということでもう少し具体化して考えていただきたい。

佐藤（誠）委員：

- ・ 国際的にはホーストレイルがメジャーになっており、阿蘇には平安時代から馬の文化があるので、草原の駅など拠点を作るときも国際水準のホーストレイルを入れて欲しい。

光岡座長：

- ・ 「草原手帳」のアイデアがあったが、これを是非つくって頂きたい。その売上げから牧野組合に寄付する、草原手帳を持っている人が牧野に入れる、入場料金を徴収する、と

というようなことを考えたらどうか。さらに、持っていることがステータスになるなど、草原手帳を持つという運動を進めていけば、また別の形の募金ができるのではないか。

湯浅委員 / オブザーバー参加：

- ・ 牧野活性化センターでは、昨年の6月から牧野の流動化を進めており、現在6箇所で貸し借りの話しが進んでいる。新規就農者(酪農)をはじめ3箇所は既に借り手が決まり、あと3箇所はまだ決まっていないが、今回提案のあった新しい事業でこれらの牧野を活用することも検討いただくなれば幸いである。
- ・ 防火林について、クヌギは最低5年は下刈りをしなければ、火を入れると完全に焼けてしまう。20m位の幅で銀杏を植えれば防火帯として効果があるのではないか。

- 以上 -